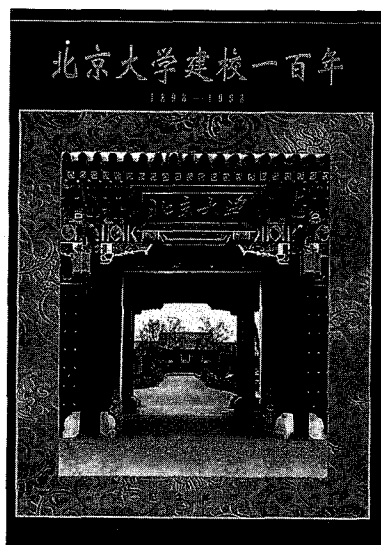


第1章

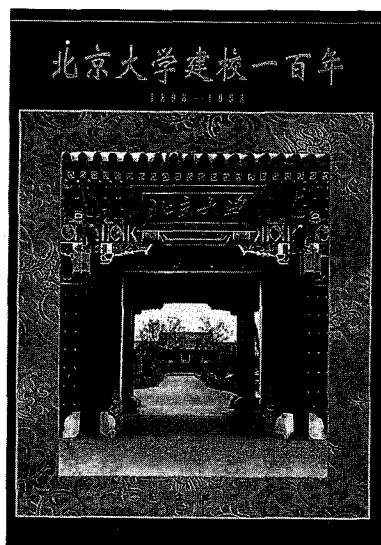
歴史と現実
に翻弄され
る北京大学



北京大学正門

第1章

歴史と現実
に翻弄され
る北京大学



北京大学正門

1 盛大に催された創立百周年記念行事

最高指導者が勢揃い
した記念式典

北京大学は自他共に認める中国ナンバーワンの大学だ。全国各地の優秀な学生が統一試験を勝ち抜いて入学してくる。その北京大学が一九九八年五月四日、創立百周年をむかえた。前年から始まった記念行事は、四月二十八日から五月四日の期間に最高の盛り上がりを見せた。

四月三十日、広東省深圳市を出発した北京行きの列車は「北京大学号」と名づけられ、沿線の卒業生を乗せて、一路北京に向かった。到着した北京西駅では、大学が用意した大型バス一〇台が彼らを出迎えた。また、国内のみならず、世界各地で活躍する多くの卒業生も母校に駆けつけた。アメリカ在住の関係者はチャーター機で北京入りした。いつもは空室の目立つ大学周辺のホテルもこの時は予約で満室となり、レストランも大盛況が続いた。大学はお祭りムード一色となった。

四月二十九日、江沢民中国共産党総書記兼国家主席が北京大学を訪問した。五月二、三日には世界の著名な大学約七〇校の学長が集まり「世界大学校長フォーラム」が開かれた。

また四日夜、大学構内で開かれた「文芸晚会」（芸術の夕べ）は国営テレビ局である中央テレビを通じて、全国に生中継された。

数多く行われた記念行事のクライマックスは、五月四日午前十時から日本の国会議事堂に相当する人民大会堂で開かれた「北京大学創立百周年祝賀大会」だった。幸いにも私も参加することができた。午前八時、祝賀大会に参加する教職員、学生、卒業生、留学生らに乗せた大型バス一〇〇台が、北京大学を出発した。北京大学から人民大会堂までの距離は約二〇キロメートル。北京大学から南に下る三環路は片道三車線すべてが通行止めとなり、北京大学専用車線に変わった。三環路を経て北京のメインストリートである長安街に入ってから、人民大会堂までの片道四車線のうち一車線が専用車線となった。

専用車線を一〇〇台ものバスが、颯爽と列をなして人民大会堂に向かう光景は圧巻だ。バスの中から見えた沿道の人々は「一体何事か」といった啞然とした表情でこの光景を眺めていた。そして、一〇〇台のバスが通り過ぎるまで、人々は道を横切ることができなかった。「北京大学ここにあり」、これだけで北京大学の存在感を示すには十分だった。

祝賀大会には、八〇〇〇人もの関係者が出席した。人民大会堂のヒナ壇には、江沢民をはじめ、全国人民代表大会（全人代、日本の国会に相当）常務委員会委員長の李鵬、國務院

総理の朱鎔基、中国人民政治協商會議主席の李瑞環ら党・政府のトップ七人が勢揃いした。学長、教育部長（日本の文部科学大臣に相当）、北京市副市長、来賓、卒業生、三好学生（思想、学習、健康の三つに優れた学生）らが演壇に上がり、祝辞を述べた。そして、最後に江沢民が演壇に立った。

中国史とともに 歩む北京大学

清朝末期の欧米列強の侵略による民族存亡の危機の最中に創立された北京大学は、二十世紀の中国の歴史とともに歩んできた。陳独秀、李大釗、魯迅、蔡元培、胡適、馬寅初など中国の歴史に大きな影響を与えた文化人が教壇に立ち、全国各地から優秀な学生たちが集まった北京大学は、新文化運動、五四運動、新中国建国、改革・開放といった中国の変革期には常に主導的役割を果たしてきた。中国の最高学府としての北京大学の地位は百年間不動のものである。

表1 中国共産党中央政治局常務委員のメンバー
(2001年12月末現在)

江沢民	(総書記、国家主席、中央軍事委員会主席)
李 鵬	(全国人民代表大会常務委員会常務委員長)
朱鎔基	(国務院総理)
李瑞環	(中国人民政治協商會議主席)
胡錦濤	(中央書記処書記、国家副主席、中央軍事委員会副主席)
尉健行	(中央規律検査委員会書記、中華全国総工会主席)
李嵐清	(国務院副総理)

(注) カッコ内は兼職。

(出所) 筆者作成。

り、「愛国、進歩、民主、科学」の伝統は今も受け継がれている。

江沢民の演説は、北京大学の歴史を振り返り、清朝末期の創立から一九四九年十月の中華人民共和国成立までの中国の変革期に北京大学がいかに主導的役割を果たしてきたかという点に終始した。他方、中華人民共和国成立以降、六〇年代後半から七〇年代半ばにかけての文化大革命や八九年の「六・四」といった政治上の大きな出来事の際、北京大学が重要な役割を果たしたことにについては、江沢民は一切触れなかった。

江沢民は最後に、学生たちに二十一世紀の中国は君たちにかかっているのだ、と言わんばかりに、大きく手を振り上げて「前進!」と、ゲキを飛ばした。それは見事なパフォーマンスだ



人民大会堂での創立百周年記念祝賀大会（1998年5月4日）

った。観客からの拍手はいつまでも鳴り止まなかった。

中央テレビで生中継

五月四日、大学構内でも
さまざまなイベントが開

かれた。午後、増設された大学図書館の落成式が行われた。増設により、北京大学図書館はアジア最大の規模になったそうだ。増設には香港の著名な実業家である李嘉誠が一〇〇〇万米ドルを寄付した。しかしながら、内装はまだ完成しておらず、落成式に必要な外見と一階の内装だけを間に合わせた。前年一九九七年七月に香港返還式典が行われた香港のコンベンション・ホールも未完成のまま、式典が開かれた。そのへんを中国人は気にしないようだ。

夜は、「文芸晚会」が特設ステージで行われた。



増設された大学図書館

入場券の枚数に限りがあり、私は大学の有力幹部とのコネにより、貴賓席の券を手に入れた。この催しは、中央テレビで全国に生中継されるため大変立派な特設ステージが作られた。ステージの組立てには十日前から中央テレビのスタッフが携わり、プロデュース自体も中央テレビがすべて仕切った。民族衣装をまとった少数民族の歌や二胡のプロの演奏、北京大学合唱団のコーラス、雑技、相声（中国の漫才）など二三の出し物が披露されたが、学生に人気があるのはやはりポップスで、王菲と那英という超人氣歌手が出演した。約二時間の「文芸晚会」は大変な盛り上がりのなかで幕を閉じた。



創立百周年記念「文芸晚会」（芸術の夕べ）（1998年5月4日）

「六・四」天安門事件

件」で生じたミゾ

創立百周年を国を挙げて祝うことは、北京大学のこれまでの歴史と中国におけるその重要性を考えれば、さほど不思議なことではないかもしれない。しかし、江沢民の来校、人民大会堂での式典、国営テレビ局による記念行事の生中継といった盛り上がりは、一国立大学にしてはちよつと度が過ぎるという印象を私はもった。それは、当局が関与しすぎていることへの違和感からくるものであった。北京大学創立百周年に対する党と政府の関与には政治的な意図があると考えるべきだろう。それは、党と政府が、そして江沢民自身が「六・四」で北京大学との間に生じたミゾの修復をはかったということだ。

「六・四」について簡単に説明すると、一九八九年四月の胡耀邦元総書記の死去に端を発し、彼の死を追悼するために、大学生らが天安門広場に集まった。その後、学生らの行動は民主化要求運動に発展し、党指導部はこの運動を「動乱」と位置づけた。さらに党・政府幹部の腐敗に不満を持つ市民が加わり、一〇〇万人ともいわれる大規模なデモ行進が行われ、一部の学生たちは天安門広場でハンストを強行した。こうした行動のなかでは、打倒共産党や李鵬総理解任のスローガンまで飛び出した。危機感を感じた党指導部は、六月四日、人民解放軍の天安門広場突入を決行し、事態は収束した。

この一連の行動は大学生を中心として繰り広げられ、その指導的役割を果たしたのが北京大学の学生だった。事件収束後、北京大学をはじめとする各大学では、当局による政治的な引締めが強化され、大学が自由な発想の場、言論の場という本来の機能を果たすことができなくなった。ここに、当局と北京大学との間に決定的なミゾが生じた。そして、学生のなかには、事件に関与したとして逮捕される者もいれば、党や政府に失望して大学を去る者もいた。また、国を去る者もいた。そして、大学全体が政治に無関心となった。この時生じたミゾは残ったままであった。

北京大学の取り

込みをはかる

しかし中国は、一九九〇年代に入り江沢民政権の下で、市場経済化が進展し、現在著しい経済発展を見せている。また、江沢民は九七年九月の第十五回党大会で、自らの政権固めに成功した。機は熟した。江沢民は、百周年を機に北京大学との関係修復に乗り出したのだ。

当局には、自らを脅かす可能性のあるものに対しては、「はじき出す」か、「取り込む」かの二つの選択肢があった。民主化の問題について言えば、魏京生や王丹といった民主活動家をそれぞれ一九九六年、九八年に国外退去させたことは、前者にあたる。北京大学については、後者を選んだ。それが、人民大会堂での記念式典になり、片道車線独占になり、

中央テレビによる記念行事の生中継になった。北京大学の教師も学生も、自分たちの百周年記念が国家級行事として扱われたことに、非常に満足している。人民大会堂での江沢民への大きな拍手はこのことを物語っていた。しかし、こうした国家級の扱いは、当局が依然として北京大学の政治的影響力を脅威であると認識していることの裏返しでもあった。そのため江沢民は、祝賀大会の演説で「愛国」をことさらに強調し、北京大学との接点をそこに求め、政権基盤をさらに強固にするために、北京大学の取り込みをはかったと言える。

「愛国」で一致

江沢民の講話は「愛国」というキーワードで一貫していた。中国が二十一世紀にさらなる経済発展を遂げ、経済的にも政治的にも世界の超大国としてのし上がっていく、そのためには若い君たちの力が必要である。こうしたメッセージが込められた江沢民の講話を聞いて、学生たちが奮い立たないはずがない。まさに両者は「愛国」で一致したのだ。

歴史を遡れば、「六・四」に至る数々の学生運動では、学生は常にスローガンとして「愛国」を掲げていた。しかし、江沢民が掲げた「愛国」と一九八九年に学生が掲げた「愛国」とではその意味が異なるだろう。前者は国の繁栄だが、後者は共産党の一党支配によって

生じたさまざまな問題がもたらした国の存亡の危機への憂いだった。江沢民の言う「愛国」を学生たちが受け入れたことは、この九年間の北京大学の変化、すなわち政治的無関心によるものだと言える。江沢民の北京大学の取り込みは、まさに絶好のタイミングだった。江沢民の目論見はひとまず成功した。

2 独立採算制の明暗

儲ける学部、
儲からない学部、
一九九九年四月二四日、北京大学の教職員運動会があり、私は見学に行つた。その開会式で目についたのは、一部の学部の教職員が学部ごとにお揃いのスーツを着ていることだった。もちろん、なかにはバラ

バラの運動着や普段着で登場する学部もあった。この差はいったい何なのだろうか。

全員スーツで登場した学部は、コンピュータ学部や光華管理学院（「学院」は学部のこと）、政治学・行政管理学部などだ。これらの学部に共通していることは、金銭的に裕福であるという点だ。このうち、光華管理学院は、全人代財經委员会主任で、著名な経済学者、厲

以寧を院長に迎え、今では近代経済学のメッカとなっている中国国内でも人気の学部だ。もともと会計学部という名称だったが、台湾の国民党系の財閥である光華グループから資金援助を受け、光華管理学院となった。学内には立派な学院独自の校舎、そして学生宿舎を建設した。また、学院の教員にはそれぞれ個室の研究室が与えられている。通常、中国の大学では、教員に個室の研究室は与えられていないため、光華管理学院の教員は優遇されている。

現在、中国の大学は独立採算制になっているため、改革・開放、市場経済化の波にうまく乗ることのできる学部は、国内外の機関からの受託研究やそれらとの共同研究によって多額の研究資金を手にしたたり、また他校や地方政府の研修に講師を派遣したり、さらにコンピュータ用のソフト開発などで独自に事業を興すことで、大学から割り当てられる運営予算以外にも、収入を得ることができるといえる。こうした学部が、その資金力を誇示するために、運動会でスーツを新調するのである。政治学・行政管理学部では、一人一〇〇〇元（一元＝一四・二元、二〇〇一年九月末現在）相当のスーツが、ワイシャツ、ネクタイ付きで各教職員に配られた。スーツを揃えた学部は、入場行進時に掲げるプラカードの文字もパソコンを使って印字するなど、見た目がキッチンとしている。

これに対し、社会主義の遺産のようなマルクス・レーニン主義学院や、経済発展に直接貢献しない歴史学部、中国文学部といった人文系学部は、予算外の収入を得る機会がほとんどない。そのため、学部ごとに教職員のボーナスの額も異なる。学部によつてはボーナスが支給されないとこともあり、ボーナスをもらつた先生から「ボーナスの額を他の学部の人には言わないでくれ」と私はクギをさされた。

学生募集の多様
化と大学財政
「科教興国」（科学技術・教育によつて、国を興す）という政策により、中国では高等教育の重視が叫ばれて久しい。それに伴い、人材育成の場としての大学が重視されている。北京大学にも、たくさんの学生が

在籍しているが、その種類はさまざまだ。

第一に「学部」で、教育部（日本の文部科学省に相当）によつて定員数が決められており、全員が学費を払っている。卒業時に学士号をもらう。これは日本と同じである。

第二に「大学院」で、計画内と在職と自費の三種類に分かれている。彼らは単位取得後、論文を提出すれば、学位をもらうことができる。(1)計画内は、在学期間が三年で、学部生同様に教育部によつて定員が決められており、学費が免除される上、一カ月二六〇元の奨学金が支給される。(2)在職は、在学期間が四年で、社会人がキャリアアップや専門技術習得

のために、職場に籍を置いたまま勉強する。学費と給料が職場によって保証されているケースが多い。例えば、北京大学法学部博士課程には三〇人の在職学生がおり、司法機関（人民法院、人民檢察院など）に籍を置きながら、博士号を取得する。入学に際しては、計画内と在職は全国統一試験と北京大学独自の試験にそれぞれ合格しなければならない。(3) 自費は、大学全体の定員数の三%を、不合格者のなかから試験の得点の高い順に入学させるものだ。彼らは学費を払わなければならない。その額は、学部によつて異なり、人気の高い法、政治学・行政管理、経済の各学部は年間の学費が一万元を超える。逆に人気のない中国文学や哲学などの人文系学部などは学費が安い。

第三に「大学院班」というのがあり、これは大学院とは異なり、全国統一試験を受けずに、北京大学の試験に合格して入学し、大学院の課程と同じ勉強をするコースである。しかし、これは単位を取得し課程を修了する、つまり学歴をもらうというだけで、論文を提出して学位をもらうことはできない。中国では学歴と学位はつきり区別されている。それでも、中国では学歴だけで、仕事上のキャリアとして十分認められるので、多くの社会人が大学院班に応募する。一九九八年の機構改革により、中央省庁の人員が五〇%削減されたが、彼らの一部が国から学費と一部生活費をもらいながら大学院班に進学している。

例えば、中国人民大学では九八年九月に、二〇〇人の削減人員を受け入れた。また清華大学では、修士課程に三四五人を受け入れた。

第四に「専科」というのがあり、高校を卒業した人が二、三年間、専門技術を学ぶコースである。北京大学には、英語、国際関係、経済、秘書等のコースがある。理論的な勉強が少なく、専門的、技術的知識を学ぶため、卒業生は就職の際、即戦力として人気が高い。

第五に「学士号取得専科」である。中国では修士号をとるためには、学部を卒業して、学士号を持つていなければならない。そのため、専科卒業後、大学院修士課程に入るために学士号が欲しい人や、単に学士号の欲しい人が、二年間勉強し、学士号を取得するものである。一九九九年から専科卒業でも修士課程に入ることができるようになった。しかし、大学進学者が増えていることから、専科と学士号取得専科への入学者は今後減ってくるだろうと予想されている。

学生募集の多様化は、国の高等教育重視以外に大学自体の経営戦略とも関係している。北京大学の財政収入のうち、教育部から毎年割り当てられるのは一億元足らずであり、それだけでは当然足りない。そのため、コンピュータ・ソフトの開発や販売を行う「方正」、「青島」や人材教育を手がける「資源集団」といった企業を経営し、収入を得ている。また

定員以外の学生から徴収する学費も大学の大きな収入になっている。特に大学院班からの収入は大きく、三割が大学に上納され、七割は学部収入となる。それでも大学財政は全体で、毎年三〇〇〇万元から四〇〇〇万元の赤字である。北京大学は一九九九年から教育部の「三六九特別基金」を受けることになり、一年目に三億元、二年目以降六億元、九億元が割り当てられることになり、財政上の負担軽減が期待されている。

学生寮の意義

学部生は、入学と同時に同じ学部の学生どうし六人で住むよう部屋が割り当てられる。そして、四年間ルームメイトが変わることはない。そのため、彼らの間には四年間で非常に強い友情が生まれ、そこで生涯にわたる友人関係が築かれる。多くの卒業生はこの点を高く評価している。

それでは、学生がなぜこれまで学生寮に住んできたのか。その理由の一つは、社会主義のシステムによるもので、学生には無料で住居を提供したためである。もう一つの理由は、一カ所に学生を集めて住ませたほうが大学側にとって管理しやすいからである。

賃貸学生アパートの出現

北京大学には「三角地」と呼ばれる場所がある。そこにある掲示板には、普段は講演会のお知らせ、映画やコンサートのチケット、日用品の安売り情報、アルバイトの募集、英語や日本語の専門学校の案内とい

った学生向け賃貸アパートの募集広告だ。例えば「京蘭大学生アパート案内」によれば、賃貸料が二人部屋（九平方メートル）で、二段ベッドの上だと半年一一八〇元、一年二〇四〇元、下だと半年一二四〇元、一年二一六〇元。二人部屋を一人で借りると、半年二一〇〇元、一年三九〇〇元。四人部屋だと、ベッドが上で半年七五〇元、一年一三〇〇元、下だと半年八一〇元、一年一四二〇元となっている。部屋には、暖房、机、イス、扇風機が

京蘭大学生公寓(后院)简介

本公寓位于海淀区六郎庄东口200米路旁，东临海淀区图书馆，西临颐和园，交通十分便利，为改善学生的学习和生活条件，本公寓在原来基础上改造了部分两人间，在原有辅助设施（食堂、浴池、厕所、水房、自习室、电脑室、乒乓球等）的基础上，又增加了体育室、可进行篮球、排球等活动。改造后的两人间面积为9平米，房间内有两张单人床、暖气、课桌、椅子等设施。本公寓内实行封闭式管理，二十四小时保安，适合学生及单身贵族居住，该公寓最短租期为半年，租金为：

两人间	每床 11.50 元/半年	2050 元/年
两人间	一人包房 2100 元/半年	3900 元/年

联系电话：62630379
 经理：6068899 呼 9512
 66708866 呼 96712
 62901166 呼 98092

乘车路线：公共 904、384、102 六郎庄站下车，六郎庄东口 200 米路南

学内に貼られた「京蘭大学生アパート案内」

ったありとあらゆる情報が所狭しと貼られている。そのため、三角地には多くの学生が集まってくる。また「六・四」発祥の地としてもよく知られている。その三角地に、一九九九年の新学期直前の八月末、これまでには目にしたことのない、これまでが多数貼られていた。それは、「海淀双圓アパート案内」とい「京蘭大学生アパート案内」とい

完備され、補助施設として食堂、シャワー、トイレ、湯沸かし場、自習室、コンピュータ室、駐車場、体育館が準備されている。

なぜ賃貸アパート　これまで大学側が学生に宿舍を完全提供してきたのだが、この時期になぜ民間の学生向け賃貸アパートが登場するようになったのだろうか。

第一に、学生数の急激な増加があげられる。建国以来中国では、学生寮の部屋数に応じて学生数が決定されていたため、学生寮の不足は問題にはならなかった。しかし、学生数の増加により、学生寮が不足した。ここ数年、北京大学の文科系の一年生は全員、北京市内のメインキャンパスの学生寮が不足しているため、メインキャンパスから車で約一時間のところにある昌平県分校で一年間を過ごしている。

学生数増加による学生寮不足のしわ寄せは現在、大学院生に及んでいる。例えば、北京大学法学部博士課程の一九九九年の計画内学生数は五〇人である。そのうち、学生寮がもらえたのは二五人にすぎない。残りは学外で宿舍を探さなければならない。そのため、周辺の賃貸アパートを探すことになった。

計画内学生以外の学生に対して学生寮を提供しないことは比較的理解しやすいが、計画

内学生数の増加に対し大学側が新しい学生寮を準備できないのは、明らかに資金不足が原因である。学生寮は長く無料で提供されてきたが、現在では有料となっており、北京大学では学部生が寮費として毎年五〇〇元を支払う。また、北京ラジオ学院は、寮費として一九九四年に九〇元を徴収したのを最初に、翌九五年一二〇元、九八年四五〇元、九九年六五〇元と年々値上げしている。

民間の学生向け賃貸アパート出現のもう一つの理由は、学生寮の維持にコストがかかるため、国の政策として、学生寮の民営化が進んでいる点にある。朱鎔基総理が進める住居制度改革により、政府機関や国有企業など単位（企業、機関、学校、軍、各種団体など人々が所属する組織の総称）による住宅の現物支給は廃止される方向にある。学生寮についても同様の傾向が出てきている。コスト削減をはかるために、最近増加している専門学校や私立大学が学生寮を賃貸アパート業者に委託するケースは増えている。また、北京大学でも、近く学生寮が完全民営化される予定である。入学すれば自動的に学生寮に入居できるシステムは今や過去のものとなりつつある。

大学のジレンマ

学生数の増加、学生寮維持コストの削減以外に、今後学生向け賃貸アパートが普及していくだろうと考えられる理由がある。それは、学生

自身の変化である。一九九九年に入学した学生はだいたい八一年生まれである。つまり、

彼らは改革・開放政策の実施により、急速に経済が発展し、経済的に豊かな生活環境のなかで育ってきた世代である。また、今後入学する学生も、いわゆる一人っ子政策の下で生まれたため、「小皇帝」という言葉に代表されるように、両親に、そして社会に過保護に育てられてきた。このような新しい世代の学生が、六人部屋の学生寮を嫌い、二人部屋、さらには一人部屋の賃貸アパートを選ぶ可能性は、今後高まってくるだろう。また、親の経済力も高まり、十分な仕送りがなされていることも、賃貸アパートの普及を支えるだろう。

賃貸アパートの普及は、大学当局による学生管理を難しくしている。学生寮では、学部からの通達、例えば休講情報や会議の召集などを、クラスに一人いる班長が同じ学部の学生が住む部屋のルーム長に伝え、ルーム長がルームメイト全員に直接伝える。賃貸アパートでは、日本のように学生が自分で電話をもつことは経済的にまだムリなので、大事な通達が伝わらなくなる。また学生寮では、学部が毎日学生に提供する新聞『人民日報』『中国青年報』を学生の間で回し読みするのだが、賃貸アパートではそれができなくなり、学生が新聞を読まなくなる。学部による学生への新聞提供は、経済的な配慮もあるが、多くの学生はこの両紙からしか情報を得ないため、結果的に「思想の統一」を促進することにな

る。

大学側は、学生の授業欠席や同棲など学生の風紀が乱れたり、アパートが反政府活動の拠点になったり、犯罪の巢になることも恐れている。学生寮での集団生活はこれまで学生間の相互監視の役割を果たしてきたと言える。そして、大学当局の懸念はすでに現実のものとなり始めている。北京大学では、学生寮に住みながらも、外に賃貸アパートを借り、そこで彼女と同棲している男子学生のケースが見られる。

大学というところは、共産党にとって重要な場所である。中国全体での大学進学率は五・九%（一九九九年）と、大学に進学できる人もごく一部に限られており、また共産党員六四五万人（二〇〇〇年末）のうち、大学卒業以上の学歴をもつ党員は二二・一%にすぎない。そのため、大学は共産党政権を支える優秀なエリートが育つ場であるとも言える。しかし同時に、大学は共産党にとって反共産党人士が生まれる恐れのある場でもある。学生の管理を優先するか、それとも経済的財源を優先するか、大学はジレンマの状態にある。そして、それは一党支配か、それとも経済発展かという市場経済化の過程で共産党がかかえるジレンマと同じものである。

3 現代学生気質

中国経済研究セン

ターの連続講演会

北京大学創立百周年にあたり各学部や学生団体主催の記念行事が多数行われたが、そのうち、学生の人気をさらったのは、ジャスティン・リンこと、林毅夫率いる中国経済研究センターの連続講演会だった。

四〇〇人以上が入る大教室がほぼ毎回「満員御礼」となり、通路や演壇の周りにも学生が陣取るほどの盛況ぶりだった。林は日本でも著書が出版されるなど著名な経済学者である。一九九八年三月三十日から始まったこの講演会は、だいたい一週間に一人のペースで、林の広範な人脈と資金調達力により、アメリカや香港などから著名な経済学者や官僚OB、企業家らを招き、中国問題を語らせるものだ。第一回目は、バンカーズ・トラストのW・オーバーホルトが「中国は次の経済大国になりうるか？」と題して講演した。会場には開演前から、北京大学だけでなく他大学の学生らも詰めかけた。その後も、楊敏徳（香港滙達集團〈Esquel Group of Companies〉董事長）、M・イントリリゲイター（M. Intriligator、カリフォルニア大学ロサンゼルス校経済学部教授）、陸啓宗（香港恒隆集團〈Hang Lung

Group) 董事長) の講演会が開かれ、どれも会場は超満員だった。さらに、細川恒(日本通商産業省元審議官)、R・チェイン(香港英之杰(Inchcape Greater China) 太平洋董事長)、D・オール(カリフォルニア大学ロサンゼルス校経済学部教授)、王英偉(香港中国工業投資集団総裁)、黄鴻年(中策集団董事長)といった人たちが演壇に立った。

「世界の中の中国」の模索

中国経済研究センターの連続講演会以外にも、例えば政治学・行政管理学部、その他の学部や学生サークルが講演会を主催した。しかし、中国経済研究センターの連続講演会とその他の講演会には大きな違いがあり、そのことは現在の北京大学の学生の関心を反映していた。

中国経済研究センターの連続講演会が非常に多くの学生たちの人気を集めた理由として、講演テーマの多くが「世界の中の中国」を模索しようというものだった点があげられる。改革・開放政策が始まって二十年あまりがたち、中国のめざましい経済発展は誰もが認めている。また、それに伴う国際舞台での中国の地位も向上している。こうしたなかで、この連続講演会は、学生たちの愛国心を掻き立てると同時に、学生たちに自分たちこそが二十一世紀の中国を背負って立つのだという責任感を自覚させ、二十一世紀の中国のあるべき姿について考えさせる機会となった。例えば陸啓宗は、先進国にはそれぞれ必ず固有の

企業モデルがあるとして、アメリカの個人主義や日本の集団主義がその国の企業モデルに反映されていることを例にあげ、「中国の企業モデルはいったい何か。現在の中国にアメリカや日本の企業のようなモデルはない」と述べ、学生たちに中国のさらなる経済発展と中国独自の企業モデルの模索を求めた。こうした煽動的なメッセージを送る陸に学生たちは拍手喝采だった。

ミ－ハー 感覚と

根強いアメリカ志向

しかし、中国経済研究センターの連続講演会は、世界に目を向けるというテーマのわりには、各講演の内容は必ずしもレベルの高いものではなかった。それにもかかわらず多くの学生たちが駆けつけたのはなぜだろうか。第一に、「世界の中の中国」という学生の自尊心をくすぐる内容だからである。第二に、香港の企業家やアメリカの学者、日本の元官僚といったように海外から講演者を招聘したことがあげられる。第三に、アメリカ留学帰りの教員が多い経済研究センターの企画だったことだ。私が北京大学に初めて長期滞在した一九九一年と比べても、学生のアメリカ志向は今なお根強い。日本の細川恒が講演した時、会場は六割ぐらいしか埋まらなかった。昼間の授業時間と重なったこと、講演が英語だったことなどの諸要因があるかもしれないが、オーバーホルトの時も同じ条件で講演は行われ、大盛況だった。



北京大学を訪れたクリントン米大統領（当時）を一目見ようと集まった大勢の学生たち（1998年6月29日）

たことは、学生のアメリカ志向を裏づけている。それは、残念ながら、日本に対する関心が低いことも示している。

中国経済研究センター以外の講演会は百人程度の教室で開かれたが、政治学・行政管理学部は、この年一九九八年三月に開かれた全人代で実施が決定したばかりの政府機構改革に焦点をあて、国务院の人事部元常務副部長の張志堅による「中国機構改革の歴史、現状、そして未来」、中国の政治学の重鎮である北京大学教授の謝慶奎による「中国政治体制改革の出发点—機構改革」と題する講演会を主催し、どれも話題性が高く、多くの学生を集めた。江沢民政権の経済政策決定に影響力をもっていると言われる中国科学院国情研究

グループの胡鞍鋼による「中国失業問題と就業戦略」、同じく著名な経済学者樊綱による「中国の当面のマクロ経済理論と政策」、中共中央規律検査委員会のメンバーで、國務院監察部スポークスマンの李玉賦による「中国の当面の反腐敗問題」と題する講演会にも多くの学生が集まり、話に聞き入っていた。これらに共通することは、現在の中国がかえる問題をテーマにしている点であり、多くの学生が集まったことは、自国の実情に対する学生の関心の高さを表している。

他方、経済自由主義学派の中心である張曙光（北京天則經濟研究所學術委员会主任）による「正式制度と非正式制度の相互作用から見るわが国の法治社会の形式」や政治学・行政管理学部の手学者張国慶による「公共意識の増強が北京大学人のイメージを作り上げる」と題する講演会は、理論的な話が先行したためか、最初こそ立ち見が出たものの、最後には聴講者が半分近くに減ってしまい、また講演後、学生から一つの質問も出ないなど、盛り上がり欠けるものだった。

一連の講演会を通じて感じられることは、北京大学の学生がミーハーであり、外国かぶれしやすく、難しい話は避ける傾向がある、ということだ。中国の学生は、私が思っていたよりも「学生」らしい。

国慶節への意識

一九九九年十月一日、中華人民共和国が建国五十周年をむかえた。最大の祝賀行事は長安街で行われたパレードだった。このパレードには、一般の人々も参加し、北京大学からも学部二年生三〇〇人が参加した。彼らは例年よりも夏休みを一カ月切り上げ、八月初めから練習を開始した。練習開始にあたり、大学の党委員会副書記が「パレードを立派に成功させよう」と号令を發した。

パレードに参加した北京大学の学生のほとんどは女子学生だった。彼女たちはイベント感覚で積極的に参加を希望した。多くの女子学生が「建国五十周年を祝うパレードに参加できて光栄だ」と思っていた。しかし、それは彼女たちだけが思っているのではない。彼女たちの両親もそう思っていた。「うちの娘がこのパレードに参加している」と。両親にとつては鼻高々なのだ。それに対し、男子学生は消極的だった。しかし、女子学生ばかりではバランスに欠けるとして、大学当局は学生幹部、黨員を中心に男子学生を参加させた。

学部生の生活

ここで、私の友人である北京大学の学生の生活ぶりを紹介しよう。最初は、ある学部の二年生の学生だ。彼は、高校の時の成績が優秀で、中国人民大学への進学を希望していた。しかし、全国統一試験の成績が予想以上に良かったので、高校の先生に北京大学に行くよう薦められ、北京大学を受験し、見事合格した。高校

の先生は、自分の功績として、北京大学に合格させたいので、受験を薦めたのだろうと彼は言う。

授業は、必修科目と、外国語として英語、日本語をとっている。二年生後期になるとコマ数も減って、空いている時間は英語の勉強に充てている。週末には、清華大学、中国人民大学の女子学生と合コンをすることもある。その時は北京大学南門近くのレストランで食事をしたり、北京の観光名所である頤和園に行く。

彼らは社会の情報をどのように得ているのだろうか。部屋には基本的にテレビがないので、いつも食事時に食堂でテレビを見ている。食堂で見ることができるテレビ番組は、大側側の録画済みの中央テレビの「新聞聯播」(午後七時からのメインニュース)、「焦点放談」(人気の時事番組、幹部の腐敗や社会問題を直撃インタビューでレポートする)、「新聞三〇分」(正午からのニュース番組)ぐらいだ。新聞は学部が『光明日報』(知識人向け)、『中国青年報』(中国共産主義青年団の機関紙)、『参考消息』(外国メディアの翻訳紙、当局にとって都合のいい海外情報満載)、『北京日報』(北京市党委員会の機関紙)を毎日一学年に二部ずつ無料配布してくれるので、これを学生どうしで回し読みする。その他『北京青年報』(北京市で最も人気のある大衆紙)などを自分で買うこともある。

学生の間には、広東省広州市などの中国南部での就職希望が多い。理由は、外資系企業が多く、給料が高いからだ。学生が就職先を選ぶポイントは基本的に給料だ。しかし、北京は首都だから、北京に残りたいという学生も多い。公務員希望者も少なくないが、給料が低いこと、さらには一九九八年の政府機構改革による人員削減による募集減の影響もあって、全体的に人気はない。同年五月、北京大学の学生用掲示板には、「先日、行った面接は、機構改革により新規募集を中止したため無効とする」という農業部からの通達が掲示された。この他、大学院への進学、アメリカへの留学を希望する学生も多い。



新学期に学内の掲示板に並ぶ優秀合格者のパネル

勝手気ままな学部生

北京大学の学生は学力こそ中国でも最高レベルだが、精神年齢はかなり低いように思われる。ある先生の話では、例えば、街で財布をなくしたからといって、先生に電話をかけて対処方法を聞いたり、卒業論文のテーマを先生に尋ねたりと学生に主体性がない。また彼らの親も子供に対し過保護である。例えば、両親が定期的に担任の先生に電話をかけて子供の近況を尋ねたり、なかには「子供に好きな女の子ができたらしい。どうか別れさせてくれ」と先生に頼み込む親もいる。

北京大学滞在中、私は何度か学部生の授業や講演会を聴講したことがある。多くの授業の場合、学生は全員出席する。しかし、授業中ずつと先生の話の間かず、英単語を覚えている学生がたくさんいる。先生に対し失礼な話であるが、学生は平気である。驚いたことは、先生が誰一人として、英単語を覚えている学生を注意しないことである。出欠をとるので、先生の話がつまらなくても、授業に出なければならぬという事情があるのかもしれない。さらに驚いたことは、放課後などに開かれる講演会でも、聴講に来ている少ない学生が講演者の話も聞かず、英単語を覚えている。講演会は任意の出席なので英単語を覚えない学生は聴講に来なければいいと思うのだがそうではない。ある学生は、部屋は六人部屋で静かに勉強できないし、図書館は座席がないからだという。講演会や授業は、

学生の自習のための座席提供の場となっているのかもしれない。それにしても、学生は自分勝手にモラルがないし、先生も学生に無関心である。

アルバイトに 精を出す大学院生

大学院生の生活はどうだろうか。彼らは学位論文を書く傍ら、生活費を稼ぐためのアルバイトにも熱心だ。例えば、法学部博士課程の学生の多くは、大学の非常勤講師や、先輩の紹介による法律事務所での作業補助などのアルバイトをしている。非常勤講師の場合、規模の小さな大学や法律学校で、一時間一〇〇〜二〇〇元が相場である。一週間に一コマ二時間が通常で、これを二校請け負うため、一カ月で一六〇〇〜三二〇〇元くらいになる。現在、社会で法律が重視されている割には、それを教えることのできる先生が不足しているので、非常勤講師の口は多い。法律事務所の場合、週に三日間、朝から夕方まで働いて、一カ月一五〇〇〜二五〇〇元である。学部生も家庭教師などのバイトをしている。

学生パソコン事情

私の友人の北京大学の学部生はパソコンを持っている。ルームメイト五人と一緒にお金を出し合って、八〇〇〇元で買った。男子学生の部屋にはだいたいパソコンが一台あるが、女子学生はパソコンへの関心が低いため、保有していない部屋が多い。と言っても、男子生徒もパソコンをワープロやゲームに使う。

彼は、インターネットには興味があるが、部屋に専用回線が引かれていないので、インターネットに接続できない。学校側が少しずつ各部屋に専用回線を引くようになってきたので、部屋でインターネットに接続する学生も増えている。パソコンを持っていない学生は、大学のコンピュータ・センターに行つて、有料でインターネットを利用する。そこに来る多くの学生のお目当ては海外のサイト、特にアメリカの大学のホームページで、留学のための資料を収集し、指導教授になつてもらいたい先生にEメールを送る。

大学院生の友人の多くは、自室でインターネットに接続する。彼らがよく利用するサイトはニュース提供サイトと北京大学、清華大学のホームページである。しかし、ニュース提供サイトに掲載されるニュースの多くは、新華社など官製ニュースであるため、それらを見ることはあまりない。彼らのお目当ては「BBS」と呼ばれる掲示板、書き込み欄である。彼らが好んで見るBBSは、北京大学と清華大学のものである。そこには、当局や指導者個人に関する暴露話や当局の政策への意見や批判、大学内のウワサ話や事件の裏話などニュース提供サイトには掲載されないニュースが多数書き込まれている。その情報源は海外のサイトや留学している友人からのEメールなどである。留学などで海外に住む友人から送られてきた海外の中国情報を国内でBBSに書き込むのだ。中国でのいちばんの

情報源は人のウワサ話だとよく言われる。昔は職場や近所での井戸端会議だったものが、インターネットに取って代わったというような感覚だろう。「俺はこれだけ知っているんだ、みんなに教えてやろう」という意識が強いため、BBSにせつせと書き込む。それを見ながら見て、次の日の話のネタにする。私が彼らから聞いた江沢民や李鵬のウワサ話の出所はどうやらBBSのようだ。しかし、彼らはけっして自分から海外のサイトにはアクセスしない。なぜならば、北京大学の寮に引かれている専用回線「中国教育・科学研究コンピュータ・ネットワーク」(CERNET)では、国内サイトへのアクセスは無料だが、海外サイトへのアクセスは有料になるからだ。そのあたりはちゃっかりしている。また、「チャイナ・ネット」といった一般のプロバイダーからは香港の『明報』や『リングゴ日報』、台湾の『中央日報』や『中国時報』といった反中国共産党系中国語新聞のサイトやアメリカの『北京の春』といった反中国共産党系中国語サイトにアクセスすることできないからである。

4 今も続く軍事訓練

軍事訓練の意義

一九八九年六月に「六・四」が起こり、その年九月の新生から各大源地である北京大学と、北京大学に並ぶ中国のエリート大学であるという理由で上海の復旦大学には、一年間の軍事訓練が課せられた。これにより一時期、北京大学への志願者が減り、合格者のレベルが下がり、代わって軍事訓練を課せられなかった対外経済貿易大学の人気が急上昇し、合格者の全国統一試験の成績が一時北京大学を上回ったと言われている。

軍事訓練は、兵役法と一九九四年に当時の国家教育委員会（日本の文部科学省に相当）と人民解放軍総参謀部・総政治部によつて改正された「普通高校学生軍事訓練大綱」によつて、学生の義務となっている。開始当初に比べれば現在では期間は短縮されたものの、軍事訓練は今も続いている。

軍事訓練を管轄するのは大学武装部である。北京大学武装部は、退役軍人である部長と

軍からの出向者二人の計三人からなり、軍事理論を教える。「六・四」以降、大学に設置された部門なので、軍事訓練をとり仕切る以外に、大学内の監視の役割もあるのかもしれない。そして、軍人にとっては、再就職先としても重要だ。

北京大学武装部が作成した「学生軍事訓練動員教育提綱」によれば、学生の軍事訓練には五つの意義がある。(1)愛国心の育成、(2)国防経費不足による予備力の蓄積、(3)党の指導を受け入れるための思想政治教育、(4)人格形成、(5)ハイテク条件下の戦争に適応した専門技術人材育成である。以上の意義を見た時、軍事訓練が、必ずしも「六・四」に対する大学へのペナルティというだけではなく、国防費削減による予備兵の充実と湾岸戦争を教訓とするハイテク化の急



学内に掲げられたスローガン：「軍事訓練は大学生が兵役義務を履行する重要な形式である」

務に応えるという国防上の要請でもあることがわかる。

軍事訓練の実際

北京大学の一年生は、入学直後から週一回の「軍事理論」という科目を一年間受講し、最後にテストを受ける。そして、軍事訓練にも合格すれば、修了証書が発行される。学生にとって、訓練の成績は卒業、就職に影響するため、手を抜くことは許されない。

彼らは一年間の理論学習の後、一九九九年八月二日から九月七日まで、「昌平高校軍訓基地」と「平谷三八軍炮兵旅団」で、それぞれ軍事訓練を行った。昌平基地は、中国化学工業大学の跡地を利用した学生訓練専用の基地である。この大学が宿舍、食堂、売店、風呂を提供しており、予算外収入を得ている。

参加した学生によれば、食費一〇〇元、軍服費四〇元を自己負担した。食費の内訳は、一般に一日八〜一〇元、学校が一人一日四元を補填する。軍服費の内訳は、学生が約三〇%を負担し、残りを学校が補填する。そのため、軍服費全体はだいたい一二〇元、学校負担が八〇元ぐらいだ。学生は、布団や生活用品を持参した。

訓練を指導したのは人民解放軍の軍人で、北京大学の訓練のために組織された軍事訓練団として、河北省から一〇〇人の軍人が動員された。三五歳ぐらいの軍人を団長とし、そ

表2 軍事訓練の一日

5時30分—6時10分	起床
6時10分—6時50分	体操
6時50分—7時30分	掃除・整理
7時30分—8時00分	朝食
8時00分—12時00分	訓練
12時00分—12時30分	昼食
12時30分—15時00分	昼寝
15時00分—18時30分	訓練
18時30分—19時00分	夕食
19時00分—20時30分	課外活動（例えば、講演、軍歌を歌う、映画鑑賞）
20時30分—21時00分	点呼
21時10分—21時30分	就寝準備
21時30分	消灯

（出所）北京大学学生へのヒアリングから筆者作成。

の下に八つの連隊が設置される。連隊長は軍人。引率教師が副連隊長、指導員、副指導員に就く。そして、一つの連隊の下には一〇の班が設置される。一つの班は一五人で、班長は軍人、副班長は学生だ。

一日のスケジュールは表2のとおりである。訓練プログラムは、第一に政治教育、第二に条令で定められた教育で、隊列動作や軍体拳、閱兵などを行う。第三に実弾射撃を含んだ軽武器射撃、第四に戦術動作、第五に行軍や野営である。

彼らは訓練の成績によつて、表彰を受ける。表彰の種類は多岐にわたり、(1)先進学部（三名）、(2)先進連隊（男子学生連隊、女子学生連隊から各一隊）、(3)先進班（各連隊から一班）、(4)

優秀指導教師（三名）、（5）優秀学生幹部（副班長）（各連隊から一、二名）、（6）優秀軍訓生（各班から一名）と分かれている。表彰されると、榮譽証書や賞状、賞品をもらい、檔案（個人の人事記録）に記載され、学校で三好学生や優秀卒業生に選ばれたり、修士課程に試験免除で入学できるなどの特典がある。軍事訓練では、朝の掃除・整理も表彰の対象になり、細かいチェック項目が設定され、毎日連隊長により得点がつけられる。しかし、得点のつけ方に学生が不満をもち、壁新聞で軍人を批判する事件が起こった。公平に得点をつけるため、学生が軍人にプレゼントを渡すことは禁止されている。また学生個人が軍人と写真を撮ることも禁止されている。しかし連隊全員による写真撮影は許されている。

問われる軍事訓練の意義

軍事訓練自体厳しいものだが、北京大学の場合、夏に行われるためさらに過酷だ。また訓練プログラムは男女同じであり、当然女性にはハンディである。そのため、訓練の最初の頃は、緊張も重なって体調不良を訴える女子学生が多い。しかし、訓練後半には仮病を使って訓練を休もうとする男子学生が増える。食事もまずく、お湯の節約から風呂は三日に一回しか入ることができない。宿舎には、扇風機もなく、蚊も多いため、夜は眠れないなど、生活環境もよくない。学生の不満は日を追って溜まってくる。そのため、ガス抜きとして、夜の課外活動でジャッキー！

チエンなどの香港映画やシルベスタ・スタローンなどのアメリカ映画を見せるなど配慮されている。また、訓練期間の中日には、学部の指導幹部が果物などを持って慰問に訪れ、学生を激励するとともに、「変なことをするな」と学生を指導した。

単調な訓練プログラムのなかで、学生がいちばん楽しみにしているのが実弾射撃だ。しかし一九九九年は、建国五十周年を控えていたため、自殺者が出たり、暴発することを恐れ、実弾射撃は中止となり、学生たちの不満を買った。同様に危険回避から、夜間訓練も中止された。

こうした生活に耐えきれない学生のなかには、夜、基地の外に逃げ出す者もいた。そのうち、外に出て酒を飲んだ学生三人が見つかり、軍事訓練が不合格となった。彼らは翌年また訓練に参加しなければならない。また、カップルが夜、密会するケースもあった。

軍事訓練の意義は大変立派なものだが、学生の意識は年々その意義からかけ離れていつている。一人っ子政策のなかで育った学生にとって、耐える美德を振りかざす軍事訓練は奇異なものに感じられるだろう。また、党や軍の腐敗ぶりを知る学生が、「わが党わが軍の優良な伝統」など信じるはずがない。意義の(1)、(3)、(4)は、現在の学生にとってナンセンスである。しかし、意義の(2)、(5)に見られるように国防上からは学生の軍事訓練は必要な

のかもしれない。しかし、学生が国防を自分のこととして受け止められるかと言えば、期待薄だろう。国防をいかに人民に理解させるか、そのために学生に軍事訓練を課することが有効かどうかということも含め、再考の余地があるかもしれない。

5 インドネシアでの華人襲撃事件への対応

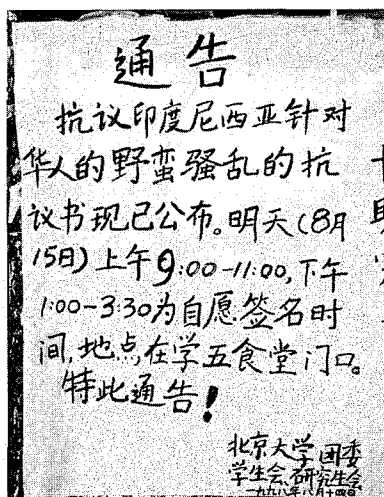
一九九八年八月十一日、北京大学構内に四枚綴りの壁新聞が貼り出された。北京大学の学生会、研究生（大学院生）会による、この年五月にインドネシアで発生した華人に対する襲撃事件への抗議と駐北京インドネシア大使館への抗議行動を呼びかけたものだ。五月に事件が起こった直後は中国では何の騒ぎも起こらなかったが、八月二日付『人民日報』に、華人の経営する商店が強奪に遭い華人の婦女が暴行を受ける、といった被害を受けたことへの抗議を表す評論員論文が掲載され、さらに八月六日付同紙では、五月十三日から十五日の間に、約五〇〇〇軒の華人系商店と家屋が焼かれ、一二〇〇人近くが死亡、約七〇人の華人婦女が暴行されたことが伝えられるなど、国内各メディアが事件の詳細を報道

しはじめたことで、この事件がクロースアップされるようになった。北京大学での動きは、こうした国内の事情に対応したものだった。

学生の対応

八月十一日の壁新聞によれば、十日午前、大学（青年）団委員会、学生会が、座談会を開き、「組織的な方法によって、正当なルートを経て、抗議運動を挙行し、われわれの意思を表明すること」を決定し、十一日、インドネシア大使館への抗議行動を行うため、一〇名の学生臨時代表が海淀区公安分局にデモ申請を行った。

また、同月十三日、インドネシア大使館への抗議書も貼り出された。その内容は、華人襲撃事件をドイツのヒトラーによるユダヤ人弾圧や日本軍による南京大虐殺と同じ恥ずべきものと非難し、華人生活区の秩序回復、事件の事実説明とその公表、



華人襲撃事件に対するインドネシアへの抗議書への署名を募る1998年8月14日の通告

暴行関与者への司法措置、被害者への賠償などを要求するものだった。

そして、同月十五日、学生たちのデモ申請への回答が出た。北京市公安局は、学生たちに理解を示したものの、「北京市各部門は全国人民が一致、洪水防止、災害救助・防止の工作に全力をあげているなか、首都の社会秩序、交通秩序の保証を考慮し、北京はもとより全国の安定大局の維持から出発して、申請を不許可」とした。これに対し、学生側も理解を示し、北京市公安局の決定を受け入れ、デモは実現しなかった。

潰された自発的行動

この一連の行動に対し、北京大学のある

学生は「こうした学生の行動を支持する。し



インドネシアを非難する壁新聞に見入る
学生たち（1998年8月14日）

かし、学生の抗議行動にはルールが必要であり、自由に参加することはできないので、学生会の動きを見て、参加したい」と話してくれた。また、他の大学の学生は、「北京大学の学生は『激進』（急進的）である。自分の大学をはじめ、他の大学でもこうした動きは起きている」という冷めた目で壁新聞を見ていた。

数人の学生たちによれば、学生によるインドネシアへの抗議行動は最初、インターネットを通じて、この事件の詳細を知った一部の学生によって企てられた。「自らの能力によってその地位を築き上げてきた華人が襲撃される事件がインドネシアで起きたことに怒りを覚える」。これが彼らの率直な感想であった。愛国心に駆られた彼らは自発的に、インドネシア政府に対する抗議運動に出ようとした。しかし、大学当局は、この動きをいち早く察知し、学生会と研究生会に対し、抗議行動をリードするよう命じた。そして、八月十日以降の抗議行動は、学生会と研究生会主導で進んでいった。

学生会と研究生会は、そのメンバーが事実上大学当局によって選ばれる大学当局の管理下に置かれた組織である。そのため、八月十日以降の抗議行動は、学生の自発性というよりも、むしろ大学当局の意向にそって行われたものであると言える。北京大学のある先生は「北京大学は、政府が利用しやすい大学でもある」と言う。十三日深夜、大学当局によ

つて関連するすべての壁新聞が取り除かれた時も、学生側の反発はなかった。

弱腰外交と情報

統制への不満

以上のような学生の行動は、中国国内ではいっさい報道されなかった。学生たちも指摘しているとおり、当時は長江流域と松花江流域で発生している洪水が深刻で、当局と人々の最大の関心事だったからだ。そんななか、デモ申請が不許可となった八月十五日の『人民日報』に、八月十三日付新華社電の転載で「正義と良識の呼びかけ」と題する新華社記者の文章が掲載された。

そこには、五月の暴徒発生以来、中国当局がいかにこの問題を重視し、積極的に対応してきたかということが延々と綴られていた。なぜ、当局がこうした弁解じみた文章を国内向けに出さなければならなかったのだろうか。それは学生の抗議行動とけつして無関係ではないだろう。

北京大学のある先生は「これは、中国政府の外交上の軟弱さに対する学生の強い不満である。壁新聞は不満の表現形式かもしれない」と言った。また、ある党関係者も「今の外交部は弱腰でダメである。インドネシアに対し何もしていない。今回の学生の行動は、政府への批判の意味がある」と言い切った。壁新聞を見ていた学生に「なぜ今ごろになって抗議活動をするのか。事件からもう三カ月も経っているのに遅すぎないか」と質問したと

ころ、彼は「最近の新聞やテレビの報道でようやく知った。今まで知らなかったからだ」と答えた。そこには「なぜ今まで知らされなかったのか」という不満が込められていた。

学生の抗議行動は愛国心からくるものだが、他方五月に事件が起きてからインドネシア政府に対し強く抗議しなかった当局への不満と、これまで何も知らされてこなかったという報道規制への不満の表出でもあった。だからこそ当局は八月十五日になつて『人民日報』に文章を掲載し、政府の対応を列挙することで、学生たちに理解を求めたのだろう。文章のタイトルである「正義と良識の呼びかけ」は、インドネシア政府への呼びかけであると同時に、華人が暴行されたことに怒りを示す学生の正義感を讃える一方で、良識をもつて行動するようという学生への呼びかけでもあった。

ある党関係者は「一九八九年のこと（六・四）があつて、北京大学の学生が騒ぐと、政府は本当に緊張するんですよ。また、起こるんじゃないかって」と言った。大学当局は、学生が自国の政府に対する抗議行動を起こすという最悪の事態を考慮して、学生のインドネシア抗議行動をいったんは自らの指導下に置いた。しかし、実際には学生たちの政府への不満を包み隠すことはできなかった。北京大学の伝統的な批判精神もまんざら捨てたものではないのかもしれない。

6 学生の政治意識

北京大学は歴史上の政治運動において重要な役割を果たしてきた。しかし、「六・四」以降、学生は政治に関心になつていと言われている。北京大学創立百周年を前にアメリカの雑誌『ニューズウィーク』（一九九八年四月十五日号、日本語版）に、「北京にも春が来た？」と題する記事が掲載された。そこには、北京大学の近況も紹介され、「クリントン米大統領の訪中を六月に控え、タブーだった民主化論議が活発化。状況は天安門事件の直前に似ているが、今回の変化にははるかに重要な意味がある」「民主化運動―キャンパスに戻れ『国家の良心』、百周年をむかえる北京大学に『復活』の兆し」と書かれていた。しかし、私の印象はまったく異なっていた。なぜならば、北京に来て一カ月たったばかりとはいえ、私には日々を脳天気にするように見えた「学生」らしい学生たちに中国の民主化を担うような気概があるとはとうてい思えなかったからである。

実際、北京大学の学生の政治意識はどうなのだろうか。北京大学が発行する『北大学生工作通信』（一九九九年第二・三期）に掲載された「一九九九年北京大学学生基本状況調査

報告」から探ってみよう。

この調査は、一九八九年から北京、天津、上海、湖北、広東、江蘇、江西など八つの省市で実施されている。おそらく「六・四」により、当局が学生の政治意識を把握する必要を感じ、実施しはじめたものと思われる。この調査は、九九年二月から三月にかけて、アンケートと面談の二つの方式で実施された。アンケートは三四九人に配布され、三四四人から回収された（回収率九八・六％）。以下、興味深い項目について、その結果を紹介しよう。

設問1「この一年間の中央の主な活動に関する評価」（表3）

一九九八年の中央の活動に対する全体的な評価は、六四・八％（「非常によい」と「まああよい」を足したもの、この設問項目の以下の数字も同様）と三分の二近くが肯定している。個別の政策では、長江流域などでの歴史的な大洪水に関連した「洪水防衛、応急対策」（九〇・九％）と「生産回復、家庭再建」（八三・六％）が第一位と第二位。また、第三位の「アジア金融危機への対応」（七九・五％）は中国政府が人民元を切り下げなかったことなどが世界的に高く評価されており、学生もこれを評価した。第四位の「対外政策、外交工作」

表3 「この1年間（1998年）の中央の主な活動に関する評価」
(%)

	非常に よい	まあまあ よい	一般	あまり よくない
①全体的な印象	13.8	51.0	29.0	4.4
②政府機構改革	7.9	46.9	33.7	10.0
③住宅制度改革	8.8	38.7	38.7	12.3
④農業・農村工作	5.0	22.9	49.3	19.9
⑤大中型国有企業の改革・発展	4.7	21.7	41.1	31.1
⑥アジア金融危機への対応	36.7	42.8	16.1	2.6
⑦金融体制改革の深化	12.9	46.0	32.0	5.6
⑧国有企業のレイオフ労働者の 基本生活保証と再就職工作	4.1	24.9	40.8	28.2
⑨密輸取締り	23.8	39.0	28.4	7.0
⑩食糧流通体制改革	10.0	37.0	40.5	9.4
⑪反腐敗、清廉の提唱	3.5	18.8	34.3	41.9
⑫法治国家	5.6	26.4	42.2	23.5
⑬科学教育により国を興す戦略の実施	13.2	36.4	36.7	12.0
⑭犯罪取締り、治安維持	5.0	39.0	38.7	16.1
⑮對外政策、外交工作	31.7	45.2	17.6	4.4
⑯洪水防御、応急対策	63.6	27.3	6.2	1.5
⑰生産回復、家庭再建 (洪水後の復興作業)	36.7	46.9	13.2	1.2
⑱祖国平和統一	25.8	34.9	27.6	10.3
⑲精神文明建設の強化	7.6	27.0	41.9	22.3

(出所)『北大学生工作通信』(1999年第二・三期)。

(七六・九%)は米中首脳の相互訪問の成果などによるものだろう。第五位の「密輸取締り」(六二・八%)、第七位の「金融体制改革の深化」(五八・九%)、第八位の「政府機構改革」(五四・八%)は、朱鎔基総理主導で行ったいくつかの改革が評価されたものである。

他方、「反腐败、清廉の提唱」(三二・三%)、「大中型国有企業の改革・発展」(二六・四%)、「農業・農村工作」(二七・九%)、「国有企業のレイオフ労働者の基本生活保証と再就職工作」(二九・〇%)の四項目は三〇%に満たない。腐敗撲滅と国有企業改革に対する学生の評価は厳しい。全体的に見て、学生の評価は常識的である。

設問2「【黨員に対し】 中国共産党加入の主要な動機は？」(表4)

共産主義信仰により入党した学生は全体の四分の一にも満たない(③)。他方、①、②、⑤、⑦を選択した学生は合わせて全体の六割を占めている。これは学生は共産党を社会的な貢献のためのチャンネル、別の見方をすれば自分の成功や出世のチャンネルと考えており、打算的に入党する学生が多いことを示している。また、④のように「内から共産党を改革したい」と考えて入党する学生も少なからずいる。

表4 「【党员に対し】 中国共産党加入の主要な動機は？」

回 答	%
①他人と社会のために多くの貢献をしたいから	28.1
②自分の社会的役割をさらに発揮し、早く成功したいから	26.7
③共産主義を信仰しているから	24.9
④共産党の現状を改革し、さらに指導的役割を発揮させるため	7.4
⑤就職と将来に有利だから	5.5
⑥生活を充実させ、一種の精神的よりどころを求めて	3.2
⑦入党することは光栄なことで、個人の価値を体现できるから	1.4
⑧両親の希望	1.4

(出所) 表3に同じ。

表5 「【非党员に対し】 中国共産党に入らない主要な理由は？」

回 答	%
①個人の条件がまだ成熟していないから	23.5
②少数の党员に対するイメージが良くない、党の 権威性が落ちているから	19.7
③どの党派にも入りたくないから	17.4
④党に対する認識と理解に欠けているから	12.1
⑤党の目的が個人の信仰に合っていないから	6.8
⑥個人の成功と直接関係がない、どうでもいい	6.8
⑦各方面からの束縛を受け、自由でないから	4.5

(出所) 表3に同じ。

設問3 「非黨員に対し」 中国共産党に入らない主要な理由は？」（表5）

入党希望者は四分の一に満たず（①）、大半は入党を希望していない。そのうち、党の権威性が落ちてゐることを認めてゐる学生は約二割（②）だが、入党しない学生の大半の理由は、政治的無関心、個人の自由重視、打算的といった現代の学生気質を反映してゐる（③⑦）。

設問4 「学生の基本的思想政治観点」（表6）

マルクス主義、社会主義に対し、肯定的に受け取る学生が大半を占め、前年に比べても「同意」の割合は、①で二・六ポイント、②で九ポイント増えている。また、中国共産党の指導に対しても、七割近くが支持しており、前年に比べても「同意」の割合は増えている（③、⑤、⑩）。この結果に対し、大学側は「わが校の学生の基本政治観点が正しいことを表している」と評している。しかし、この評価は片面的で、①、⑤、⑩については「不同意」の割合も増えている。

社会主義と資本主義・市場経済との関係に関する設問④、⑥、⑨では、資本主義を肯定的に評価する「同意」の割合がそれぞれ、八・一ポイント、六・三ポイント、八ポイント

表6 「学生の基本的思想政治観点」

(%)

評 価 調査年	同 意		不同意		判断が難しい	
	1998	1999	1998	1999	1998	1999
①社会主義は最終的に資本主義に勝利することができる	43.8	65.4	11.4	13.8	36.0	19.6
②マルクスレーニン主義, 毛沢東思想, 鄧小平理論は互いに受け入れる科学体系である	69.6	78.6	11.6	11.4	11.4	8.8
③多党制は中国の国情に不適合である	52.7	67.8	19.5	19.1	21.4	12.3
④社会主義は資本主義と同じ方向に向かっている	36.2	44.3	31.5	36.4	23.1	18.5
⑤社会主義現代化建設の時期全体において, 中国共産党の指導を堅持しなければならない	74.4	79.2	7.9	10.3	13.3	8.8
⑥社会主義初級段階は実際に資本主義をやり直すものである	31.8	38.1	48.1	49.3	12.6	10.9
⑦人民代表大会制度を健全化することは, わが国の民主発揚の最も主要な方式である	69.0	76.2	13.6	16.4	12.3	5.6
⑧社会主義市場経済を発展させることは, 精神文明を犠牲にするという代価を払う	15.3	31.1	77.1	63.0	3.8	4.7
⑨私有化はわが国の社会発展の必然的な選択である	22.5	30.5	47.9	52.5	24.9	15.2
⑩中国共産党は自身の建設を立派に行う能力をもっている	59.7	70.2	9.5	12.0	27.3	15.5

(出所) 表3に同じ。

前年より増えている。これは、現在の経済体制を資本主義と同じものと評価し、またその資本主義がもたらす私有化の存在も認めている学生がかなりいることを示している。他方、資本主義を肯定的に評価しない「不同意」の割合も前年より増加しており、⑥と⑨では「同意」を上回っている（⑥一一・二ポイント高、⑨二二ポイント高）。

⑧について、ここで言う「精神文明」とは共産主義の思想を意味しており、「精神文明を犠牲にする」とは共産主義思想を犠牲にして、市場経済化に伴い西側思想が浸透していくことを意味している。ここでも「同意」が前年の二倍になっており、西側思想の浸透を必然と考えている学生が増えていることを表している。他方、「不同意」は前年に比べ一四・一ポイント減となっているものの、依然として約三分の一を占めている。

この設問に対する回答には全体として、市場経済化の深化に伴う、政治に対する学生の考え方の変化や揺れがよく表れている。つまり、市場経済化、そしてそれによる思想的な変化を受け入れようとする学生が増えている。他方、社会主義という既存の思想を否定したくない学生も依然として多い。しかし、これは学生が必ずしも社会主義を支持しているというのではないだろう。むしろ就職難や治安悪化など市場経済化の負の面に直面し、資本主義のアンチテーゼとして社会主義を支持したのではないだろうか。大学側は、この結

果、特に④、⑥、⑨の結果を重視し、「今後の政治理論課の講義、および思想政治教育のなかで、指導を加え、はつきりさせる必要がある」として、危機感を露わにしている。

設問5 「自分自身に対する評価」(表7)

全国のエリートが集まっている北京大学だけに、学生の「競争意識」と「進取の意識」は、必ず抜けて強い。また、「新しいものを創り出す能力」「理想信念」もかなり強い。他方、前記の対極に位置する「奉仕の精神」「組織的規律性」「忍耐能力」「協力意識」「基礎文明の修練」は、かなり弱い。

この設問の結果は、学生の価値観が非常にアンバランスであることを表している。

表7 「自分自身に対する評価」

(%)

評 価	強 い		一 般		弱 い	
	1998	1999	1998	1999	1998	1999
調査年	1998	1999	1998	1999	1998	1999
①理想信念	55.3	55.5	30.5	25.8	13.6	17.3
②社会的責任	45.4	43.5	33.6	30.5	20.4	24.7
③奉仕の精神	17.6	18.8	45.0	44.3	37.0	35.5
④協力意識	21.8	25.5	45.8	39.3	31.8	33.7
⑤進取の意識	86.5	86.0	9.9	9.4	3.1	4.1
⑥競争意識	92.0	91.5	5.9	4.1	1.6	3.0
⑦新しいものを創り出す能力	—	55.8	—	27.6	—	15.3
⑧基礎文明の修練	34.0	34.3	42.5	37.5	22.7	26.7
⑨自立能力	42.8	41.9	41.0	37.0	15.6	19.6
⑩組織的規律性	16.9	20.8	38.5	34.9	42.4	42.8
⑪忍耐能力	—	25.2	—	38.1	—	34.9

(出所) 表3に同じ。

そのことが、「自分勝手、無責任、幼稚」という現代学生、特に北京大学のようなエリート校の学生気質を生み出す原因の一つとなっているのではないだろうか。この結果を大学側は「家庭環境や社会環境が彼ら（学生）に与える影響がかなり大きいことと関係している。現代の大学生が協力意識や自立能力を養い、組織規律性や奉仕の精神、「心理承受能力」（挫折や失敗をした時に動揺せず耐える力）を増加させるにはどうしたらいいか、われわれ思想教育工作者は常に考えなければならぬ問題である」と分析している。

急速な変化への対応

改革・開放政策から市場経済化へと進められてきた経済体制改革は、経済発展とともに急速な社会の変化をもたらした。それは当然、学生の生活や将来設計にも大きな影響を与えている。この変化のなかで育ってきた学生たちには三つの意識が育っている。第一は、これまで享受してきた経済的な豊かさを引き続き享受したいと思っているため、変革よりも現状を維持したいという現状肯定意識である。第二は、競争社会の到来で必ずしもすべての人が平等にチャンスを得られるわけではなくなったため、自分さえよければいいと考える利己主義である。そして第三に、社会の変化に対応しなければ、自分たちの未来はないという脅迫意識である。現在の学生がもつ現状肯定意識と利己主義、そして脅迫意識が、学生を政治に無関心にしていっ



1999年5月の駐ユーゴスラビアの中国大使館爆撃事件でアメリカを抗議する壁新聞：「打倒米帝国主義 中国人民万歳」（中央ビラの上側）

た。彼らには、現在の政治体制を改革することでも自分のチャンスを拡大しようという気はない。むしろ、世の中が政治的に混乱することで、自分のチャンスを失うことを恐れている。しかし、彼らはなにかの拍子に政治体制が変わったとしても、それはそれで対応していくという器用さももっているように思われる。

「六・四」が学生を保守化させたという意見をよく耳にする。しかし、現在の学生には実体験としての「六・四」はない。両者は直接には無関係である。むしろ、「六・四」の後遺症が深刻なのは大学当局や当時世の中を変えようと命を懸け、そして挫折した教師である。この変革への失望が大学

全体を保守化させる雰囲気を作り出している。その意味では、現在の学生の保守化、政治的無関心化に対する「六・四」の影響は間接的なものと言える。

しかし、学生が完全に政治的無関心であるわけではない。例えば、すでに述べたインドネシアでの華人襲撃事件でのインドネシア政府に対する抗議行動や、一九九九年五月にNATO軍によるユーゴスラビアの中国大使館爆撃事件が勃発した時のアメリカに対する抗議行動は、愛国心を示しただけではなく、政府の弱腰外交に対する不満も示した。学生自身、国外での事件や愛国心を傷つけられる出来事に対する抗議行動は、「六・四」等とは違い、基本的に当局ににらまれることがない



アメリカに抗議し、星条旗に火をつける学生

ことを知っている。もしかしたら、愛国心をカムフラージュにして学生は、弱腰外交に対する不満だけではなく、党や政府の幹部の腐敗や企業改革がもたらす失業者や下崗（レイオフ、一時帰休者）の増加といった党や政府の失政に対する不満をも表明しているのかもしれない。

NATO軍の爆撃事件の直後、TOEFLの試験があつたが、清華大学のある女子学生がアメリカに抗議するためにアメリカ留学を断念し、TOEFLの試験を受けなかつたことを愛国的であるとして一部のマスコミが称賛した。しかし、多くの学生は彼女をバカにした。アメリカ批判とアメリカ留学は別の次元で、批判と自分の夢は違う。アメリカは自分の理想を実現するための場所であると。学生は政治的無関心であり、他方実に理知的なのである。

7 二十一世紀を担う子供たち

私の娘は、一九九八年四月から約二年間（当時三〜四歳）、北京大学付属幼稚園に通つた。

ある日の父兄会で、園長が「二十一世紀を担う人材育成が私たちの役目です」と述べた。教育立国を掲げる中国にとって、その第一歩が幼稚園だ。

改革・開放政策実施以降の社会の変化と一人っ子政策により、子供を取り巻く環境は大きく変化した。それに伴い、幼稚園も変化した。そこには中国の変化の縮図を見ることができる。

北京大学付属幼稚園とは

北京大学付属幼稚園（以下、北大幼稚園）は、北京大学に勤める教職員の住居アパートが建ち並ぶなかにあり、彼らの子女が通っている。教職員といっても、大学の教員、管理部門の人たちだけでなく、大学が経営する食堂や商店、ホテル、大学病院などで働く人たち、そして大学付属の小中学校の教職員も含まれる。夫婦のうち、どちらかが北京大学で働いていれば、北大幼稚園に子供を預けることができる。園児は一歳から六歳までで、年齢ごとに一〜二クラスが設置され、一クラスの人数はだいたい三〇人で、先生は一クラス三人である。

預かってくれる時間帯には二種類ある。一つは「日託」と言われる月曜日から金曜日の午前七時三〇分から午後五時三〇分までで、日中だけ預かってもらうというものだ。もう一つは、「全託」と言われる月曜日の朝に預けて、夜も幼稚園で宿泊させ、金曜日の夕方に



北京大学幼稚園(燕東園)の正門

迎えに行くというものだ。中国の幼稚園はかつては全託が普通だった。家庭の事情により現在も全託の子供はいるが、大部分は日託になっている。しかし、幼稚園側は父兄に全託を勧める。なぜならば、全託は日託に比べ学費が高いため、幼稚園の収入増になるからだ。

さて、日託は毎日送り迎えが必要だ。

と、幼稚園の門の前は迎えに来た人でいっぱいになる。迎えに来るのは、母親だけではなく、父親も多い。父母が全体の六〇七割ぐらいで、残りはおじいちゃん、おばあちゃん、そしてお手伝いさんもいる。大学の教職員の給料は他の職種に比べて特別高いわけではないが、お手伝いさんを雇っている人が多い。お手伝いさんの時給はだいたい一時間一〇円で、彼らはこの値段を必ずしも大きな負担だとは感じていない。お金で時間を買うという

合理的な考えの人たちが多い。また北京のような都市部では核家族化が進んでいるため、お手伝いさんを雇わざるを得ないという事情もある。

迎えに来る人のほとんどは自転車だが、なかには原付バイクや自動車で来る人もいる。娘が通った二年間に自動車で迎えに来る人は増えた。これらの車が自家用車なのか、それとも職場のものかはよくわからない。しかし、車の中を覗いてみる限りでは、自家用車の比率が高いように思われた。

幼稚園での食事は、朝、昼、夕方の三回あり、メニューは主食（白米、麵、饅頭（中国式蒸しパン））、おかず（鶏肉と卵の炒め物、チンジャオロースなど）、スープ、果物といったごく普通の中華料理で、すべて園内で作られる。

毎月の費用の内訳は、国に納めるものとして「託児補助費」八〇元、「保育費・寄宿費」一六〇元、「手続き代行費」三〇元、北京市に納めるものとして「教育助學費」二三〇元、幼稚園に納めるものとして「食事費」一三〇元で、合計では六三〇元にのぼる。全託になると、これに約二〇〇元が追加される。費用は基本的に一年間一括払いなのだが、私のように一年間いるかどうか不確定な場合は、月払いになる。このうち教育助學費は、北京市戸籍の有無により二種類に分かれる。第一に、北京市戸籍をもつ北京大学教職員で、一カ月

二〇〇元。第二に、北京大学関係者でない、もしくは北京市戸籍がない人で、空きがあれば預けることができる。彼らの費用は一カ月二三〇元と割高だ。私の場合は後者にあたる。北京大学に来てすぐに私は北大幼稚園に娘の入園を申請したが、最初「昼寝用ベッドに空きがない」と断られた。そのため、私は知り合いである北京大学の有力幹部に事情を話したところ、彼が幼稚園に電話をかけてくれた。そうすると翌日「ベッドが一つ空いた」との連絡があり、入学が許可された。中国では今でも「関係」(コネ)が大切だ。

先生に誉められたい

北大幼稚園には制服がなく、私服である。日本の幼稚園は、制服のところが多く、私服の場合でも遊んで汚れてもいいような服を着てくるよう指導する。しかし、中国では、よそ行きの服を着てくる子も多く、なかには、特別の行事があるわけでもないのに、日本では発表会の時に着るようなワンピースのドレスを着てくる子もいる。そんな時、先生はみんなの前で「××ちゃん、今日の服カワイイね」などと誉める。これは先生が正直に気持ちを表しているだけで、他意があるわけではない。それ以外にも、「今日の髪型はかわいいね」「今日の靴はかわいいね」というように、中国の先生はとにかくよく誉める。しかしこれが問題だ。先生が誰か一人を誉めようものなら、次の日が大変だ。

例えば、一九九九年七月のある日、先生が一人の園児のワンピースを誉めたら、翌日、女の子みんながワンピースを着てきたのだ。前年九八年の夏はTシャツとスパッツといったツーピースも着ていた娘が、九九年の夏は一度もツーピースを着ることなく、ワンピースしか着なかった。もう一つの例をあげると、ある日の朝、娘が登園前に「今日は絵本を持っていく」と言いだした。よく聞いてみると、前の日にある園児が幼稚園に絵本を持ってきて、それを先生がみんなの前で読んで聞かせたそうだった。それで「私も持っていつて先生に読んでもらおう」のだそうだった。そして、その日の夜、娘の話を聞いてみると、みんなが絵本を持って登園したそうだった。その他、女の子全員の髪型が突然三つ編みになったということもあった。

幼稚園内で何かが流行するということは、北大幼稚園に限らず、日本の幼稚園でも見られることだ。しかし、北大幼稚園の場合、先生が流行を決定し、それに園児たちが追随している。しかもそこには「先生に誉められたい」という子供たちの心理が反映しており、子供たちにとって先生の実在は絶対だ。

また、朝、娘を幼稚園に送っていくと、先生は「今日は第×名(×番)ね」と順番をつけてくれる。何番目に来ようが、幼稚園には時間までに行けばいいだろうと私は思うのだ。

が、娘は「今日は第一名にならなきゃ」と家を早く出る。幼稚園に限らず、中国ではよく順番をつけ、「世界一」とか、世界一になれなければ「アジアナンバーワン」といったように、一番になることを良しとする。幼稚園児どうしても、何かと順番をつけたがる。遊んでいても、またアパートの階段を上る時も、すぐに「第×名」と叫ぶ。小さい時から競争意識が養われ、一位になることがいいことだと教え込まれる。

自然な形で
中央テレビでは午後七時のメインニュース「新聞聯播」の前に必ず中国国歌が流れる。娘が北大幼稚園に通いはじめて二週間もたたないうちに、このテレビから流れる中国国歌に異常に反応するようになったのには私も驚いた。そして、それはさらにエスカレートし、いつしかテレビから中国国歌が流れると、敬礼をして行進しながら歌い出すようになった。幼稚園では、週に一度屋外で、敬礼したまま中国国歌を歌いながら行進練習をしているというのだ。

また、娘が幼稚園で習った歌は、「少年先鋒隊の歌」とか「私たちは共產主義の後継者」といった歌や、歌詞に「毛（沢東）主席」が登場する歌とか、政治的な歌が多い。一九九九年十二月のマカオ返還の時もそうだった。「七子之歌」という公式のテーマソングを幼稚園では毎日歌わされ、またお絵描きの時間にはマカオ特別行政区の旗を描かされていた。マ

カオ返還の意味どころか、マカオが何なのかさえわからなくても、子供のなかには「マカオ回帰（復帰）」という言葉が浸透していった。

このように家庭ではなく、幼稚園という子供にとって絶対的な場所で、歌を歌ったり、絵を描かせたりすることを通じて、自然な形で愛国主義教育が行われている。それによって、子供たちも細かいことはわからないままごく自然にそれらを受け入れ、思考にビルトインされていく。愛国主義教育に欠ける日本は、この点で中国を少し見習ってもいいかもしれない。

愛国主義だけではない。一九九九年十月末に私は天安門広場で公安が法輪功メンバーを拘束するところを写した写真のフィルムを没収されたのだが、その時公安に対して私が名前を名乗る名乗らないで押し問答した話をしたところ、娘に「警察叔叔（おじちゃん）にはキッチンとお名前を言わないといけないのよ。警察叔叔は偉いんだから。わかった？」と諭されてしまった。どうやら幼稚園で、公安の言うことは聞かなければならないのだと教えられているようだ。私にしてみれば、汚職ばかりやっている「公安野郎」と思うのだが、公安は偉いものだと言った子供たちは幼稚園でキッチンと教育されている。

真似る技術

お絵かきというのは、題材があつてそれを見ながら描くのが普通である。

しかし中国の幼稚園では、花の絵を描く場合も、先生が描いた花の絵を見て、子供たちはそれを真似して描くのである。そのため、花びらの枚数が全員同じになるのである。先生は「うまく真似ることができるといい」などとは言わないが、このやり方では、子供のなかに「上手に真似るのがいいこと」だという価値観が自然と芽生えていく。これでは独創性は生まれない。

大学の授業でも、学生は先生の言うことをそのままノートに写し、テストではそれを丸暗記し、解答する。そうしなければ正解にならない。中国の大学生が、自分の考えを話すのはダメだが、穴埋め問題は得意な理由がわかるような気がする。その原点は幼児期にあるのかもしれない。

ケーキ持参で

誕生会は訓練の場

娘のクラスでは一年間に四人の園児の誕生会があつた。日本の幼稚園でも誕生会はやるが、幼稚園が行事として行うのが普通だ。しかし、娘のクラスでは、昼間に親がケーキを持ってきて、わが子のために誕生会をやるのだ。みんなが「祝你生日快乐！」（ハッピー・バースデー・トゥー）と歌を歌い、誕生日の子供が「谢谢大家！」（みなさん、ありがとう）と言って、その子の親

がみんなにケーキを切って振る舞う。このような誕生会は、娘のクラスだけではなく他のクラスでも同様に行われていた。

この話を聞いた私は、親が「子供のためにこれだけのことをしてやれる」ということをみんなに示したいのかなあと思った。しかし、あるお母さんに聞いてみたところ、そうではないという。

「中国人は、日頃は仕事もしないで、フラフラしていても、何か会合があると、マイクを持って立派な演説をぶつでしょう。中国人は人前でいかに自分をアピールすることができるということが一番大事なんです。職場で出世するには、仕事ができるかどうかもあるけれど、人前で堂々と話ができるかどうかが重要なんです。そして、上司はその人の話を聞いて、評価し、抜擢するんです。」

昔は『社会で生きていくこと』政治』だったから、子供も日常生活のなかで自然と自分のことをアピールする術を身につけていったけれども、最近の子にはそうした機会がない。だから、親がそういう場を作ってあげるんです。この誕生会も、自分の子をクラスメイトの中心の場に据えてやって、自己アピールをさせるためのもので、子に対する訓練の場、自信をつけさせる場を親が与えてるんです」。

また、ある人は自己アピールを「他人からバカにされないために必要なことだ」と言う。最近では、子供向けに自己表現の仕方を教える塾があつて、自己アピールの訓練をさせている親も多いそうだ。

親が子供に対し自分の考え方を人前で口にできる積極性を求めることが悪いことだとは思わない。しかし、自分の考え方を積極的に口に出せることと、中国の幼稚園児のお母さんが言う自己アピールとはどこか違うような気がする。自己アピールが上手かどうかは性格であつて、上手でないこともまた性格だ。先ほどのお母さんも次のように言っている。

「子供のうちに自己アピールが上手だからといって、大きくなつて成功するとは言えません。むしろ成功しない子のほうが多いですよ」。

教育熱心な親

ある日、幼稚園の先生から子供の写真を一枚もつてくるように言われた。教室の外に、みんなの写真を横に並べて貼るからだ。そしてその下には、子供への希望・願いを書く欄があつて、親がそれぞれ書いていくのだ。「身体が健康であるように」とか、「勇敢な子になるように」などさまざまあるなか、多くの親が書いていて目についたのが「早く成功するように」というものだった。この世に子供の成功を願わない親など一人もいない。日本にも「将来、立派な人になつてほしい」と願う親はたくさんい

るが、「早く」成功することを願う親は少ないだろう。しかし、中国人は「早い」成功を願っているのだ。

華人の経済活動の特徴として投資の早期回収という点があることはよく指摘される。これと「早く成功するように」という子供への親の願いには、相通じるものがあるように思われる。親にとって、子供の養育は投資に等しい。自分たちの老後の面倒を見てもらわなければならないからだ。さらに一人っ子政策による子供への投資は以前より増えている。ならば、できるだけ早く投資を回収したいと考える親も多いのではないだろうか。

そのため、親は教育には熱心だ。先生に対しても積極的いろいろな要求をする。ある日の父母会では、多くの親がコンピュータ操作や英語を教えるよう先生に求めた。また北大幼稚園には、少なくとも外国帰りの教員の子供が通っている。そのため、母親は「以前通っていたアメリカの幼稚園では、あんなことこんなことをやってくれたが、先生はやってくれるのかしら」といったようなことを言つて、先生に詰め寄っていた。

この父母会で、先生が遼寧大学の××先生が開発した計算学習機というものを紹介し、購入希望者を募ったところ、たくさんの親が購入した。また、当時建設中だった新校舎には、コンピュータ室が設置され、一クラス一人にパソコン一台があたる予定だ。しかし、

先生自体がコンピュータに疎いため、有効に活用されるかどうかはわからない。

一九九九年九月からは、父兄の要望に応えて、週に三回、夕食後に一時間の「興趣班」（趣味班）という任意の参加による課外クラスが開かれるようになった。月曜日が踊りの班、水曜日が工作班、木曜日が絵画班だ。費用は、一つの班で三カ月八〇元。すべての生徒が参加したわけではなかったが、娘のクラスでは最初こそ多くなかった参加者も、「あの子もやっているから」という理由で、参加者が増え、三〇人中一五、六人が三つの班すべてに参加した。二四〇元という費用は父兄にとつて大した負担ではない。先生にしても、勤務時間外にクラスを開くことから、給与外収入となり歓迎だ。これ以外にも、英語やバレエ、ピアノなど



踊る園児たち

園外での習い事に通う子供も多い。幼稚園児の生活はけっこう忙しい。

「今の大学生のよう
になつていいのか」

一人っ子政策の実施により、子供に対する親の期待がますます大きくなつてゐる。また、改革・開放政策の実施で社会そのものが大きく変化したことにより、子供の教育に対する考え方も変化し、その重要性も高まつてきている。しかしそれに伴い、子供に対する物理的、精神的プレッシャーはますます高まつており、それは低年齢化してきており、長期的には大きな問題をはらんでゐると言えるだろう。

一九九八年十一月に幼稚園の主催により、教育専門家である方明教授による「早期家庭教育の重要性とその主要内容」と題する講演会が開かれた。そこで方教授は次のように述べた。「四、五歳の子供に英語やコンピュータを教えて何になる。今の北京大学の学生を見てみる。大学に入つても遊んでばかり。性格も自分勝手に、自立できず、挙げ句の果てには自殺者が絶えない。自分の子供があんな風になつてもいいのか。幼稚園のうちは、子供は自然に触れさせ、伸び伸びと育てる情緒教育がいちばん大切だ。英語やコンピュータはもつと大きくなつてからでも遅くない」。誠にごもつともなお話で、これを聞いた親はみんな「その通り」と賛同するのだが、実際やつてゐることといえ、すでに述べたとおり

だ。

中国の教育がかかえる問題は、中国だけの問題なのだろうか。それらは中国の歴史、社会制度によつてもたらされたものであり、またそれらの変化によつてもたらされたものであることは否定できない。しかし、こうした問題は必ずしも中国特有のものではなく、日本でも見られる。それは教育の問題だけではない。犯罪の増加、離婚の増加、男女の平等といった社会問題の多くで、中国と日本には共通点があるように思われる。社会のあり方は経済の発展状況によつて規定される。日本と共通した社会問題が中国で発生していることは、中国の経済がかなり発展してきたことを統計以外の面でも裏づけていると言える。

それでも発展する幼稚園

二十一世紀の担い手を育てる幼稚園。幼稚園の発展に欠かせない資金をいかに調達するか、幼稚園にとって重要な問題である。

その性格上自己資金の調達が難しい幼稚園は運営資金を政府に頼るしかない。北大幼稚園でも北京市の重点幼稚園に選ばれるかどうかということが学校運営上の死活問題である。なぜならば、重点幼稚園に選ばれると、より多くの資金が回ってくるからである。そのため、幼稚園間の競争は激しい。



21世紀の担い手たち

重点幼稚園の選考では、各幼稚園の教育実績が重視される。例えば、子供たちの発育状況だ。幼稚園では、毎月園児の健康診断と基本的な運動能力のテストが実施される。他の幼稚園よりも、平均身長が高かったり、走るタイムが速ければ、その幼稚園の評価は高くなる。そのため、健康診断や運動能力テストの結果は廊下に貼り出され、身長の高い子は赤ペンでチェックされる。また、英語やコンピュータ教育の早期実施、興味班の実施も、父兄の要求とはいえ、教育内容充実の成果として審査の際にプラスに働く。先ほど述べた踊りの班は、踊りを通じて身体を鍛えることが当初の目的だったが、二カ月たったあたりから様相が変わってきた。週一回のはずが、休園日の土曜日の午後にも二時間開かれ

るようになった。その理由は、二〇〇〇年五月に開かれる北京市の幼稚園児舞蹈大会に出て、それを勝ち抜き、その後の全国大会出場を目指すことになったからだ。先生の力の入れ具合もしだいに変わってきた。また、子供たちもそれまで普通の運動服でやっていたのが、一着七〇元もするレオタードを準備するなど本格的になった。

また、北大幼稚園に初の大卒先生もお目見えした。娘のクラス主任の先生は一九九八年七月に北京師範大学を卒業したばかりだった。他の幼稚園での大卒の採用状況はわからないが、決して多くはないだろう。北大幼稚園内には、大学を卒業したばかりの若い先生がクラス主任になって、いい気のしない先生もいただろう。しかし園長の話から判断すると、彼女に対する北大幼稚園の期待は大きい。父兄会でのこの大卒先生の話しぶりは自信たっぷり、堂々としたものだ。娘がこの先生のクラスに入ったのは、大卒先生が外国人を立派に教育するという実績作りもあつたにちがいない。今後、幼稚園の先生も学歴が重視されるようになるかもしれないし、大卒先生をどのくらい有しているかも重点幼稚園の選考の対象になるかもしれない。

8 「六・四天安門事件」への評価

一九九九年六月四日、「六・四」が十周年をむかえた。六月三日、四日の両日、北京大学内を歩いてみた。学生たちは授業に出ており、昼休みも広場でジュースを飲みながらくつろいだり、テニスをしたりと、表面上はいつもとまったく変わりなかった。特に四日は、学内の銀行のATM機に、週末に遊ぶための資金を引き出すためか、長蛇の列ができているのが目についた。掲示板のある三角地も「六・四」に関連する貼り紙や壁新聞などは見当たらなかった。また学生会、研究生会の本部も覗いたが、特に変わったことはなかった。校門の出入りについては、明らかに学生でないという人に対しては身分証明書の提示が求められたが、これが「六・四」だからなのかどうかはわからない。教師や党員、学生会や研究生会などの学生幹部に対しては、関連の学習会があった。しかし、一般学生に対しては、六月四日以前に大学側から、「六・四」に関する何か特別な通達が出ているということはなかった。

事件から十年たった現在、中国人は「六・四」をどう見ているのだろうか。「六・四」はもう遠い過去の歴史になってしまったのかもしれない。

メディアは十周年
をどう伝えたか

公式のメディアが一九九九年六月四日前後に、「六・四」について触れたのは、以下に紹介する『人民日報』紙上に掲載された三つの記事だけであった。

第一は、五月三十一日付四面に掲載されたもので、五月二五日、二七日にアメリカ上下両院で可決された「『六・四』十周年反中国決議」に対し、全人代外交委員会責任者が抗議の意を発表したことを伝えた。「六・四」に関する部分は、「この風波（『六・四』の政治風波）で、アメリカなど一部西側国家の反中国勢力が、光り輝かない役割を果たした。彼らは積極的にこの動乱に参加し、彼らのメディアが大量に作り出し、まき散らしたショッキングなデマを利用して、国際社会を騙し、欺き、また直接動乱分子に入れ知恵をして、銭やモノを渡し、支持を与えた」となっている。

第二は、六月三日付の一面トップに掲載されたもので、ユーゴスラビアの中国大使館に勤務し、この年の五月にNATO軍の空爆で被害を受けた人たちの帰国を歓迎する大会における江沢民の講話の学習運動を鼓舞する社説だが、その内容は社会の安定と結びつけて、「六・四」に触れている。「国内外の敵対勢力は、社会主義中国が前進し、発展しているのを見たいと思わないし、邪魔して破壊してやろうと苦心惨憺し、われわれに対し『西化』

（西側化）、『分化』（分裂化）を進めている。われわれは、民族の尊厳と人民の幸福を維持し、改革・開放の成果を守り、発展させるために、絶えず頭脳を冷静に保ち、敵対勢力のわれわれに対する侵入、転覆、分裂を高度に警戒し、社会秩序を破壊し、治安に危害を与える各種の犯罪活動を厳しく取り締まらなければならない。政治局面の安定団結を破壊する行為に対しては、いつだろうが、どこからだろうが、あらゆる形式を採り、断固として法によつて、萌芽の状態で処置しなければならない。西側列強の侮辱をイヤというほど経験した中華民族は、動乱の苦をよく知り、安定の益を深く受け、安定団結の重要性を深く知っている。社会政治の安定を維持することは人々の責任である。われわれは、自分の身を守るように社会の安定を維持し、全国の各民族人民の団結を維持しなければならない。実践が力をもつて証明しているように、旗幟を鮮明にして、断固として一九八九年の春と夏の変わり目に北京で発生したあの政治風波を鎮めたことは、非常に時期にかなひ、十分必要で、力を持って国家の独立、尊厳、安全、そして安定を守り、改革・開放と経済建設の持続的、健全な発展を保証した」。

第三は、六月五日付に掲載された大学生へのインタビュー記事で、異例にも一面トップに掲載された。一見、「六・四」と関係なさそうだが、大学生が十年前とは大きく価値観が

変わったことを紹介することで、大学生が再び「六・四」のような騒ぎを起こすことは無いということを示している。「十年前、鄧小平同志は大所高所からモノを見て言った。『中国の問題で、何よりも重大なことは安定が必要なことである』。十年後の今日、中国で何よりも重大なことは依然として安定である。中国人民大学の学生は言う。『われわれは再び現実に直面している。改革・開放は後戻りすることはできないし、改革もますます安定に依拠している。安定には、多くの冷静が必要で、落着きの無さは少しでいい、多くの理性が必要で、幻想は少しでいい』。安定は大局であり、安定は改革・開放の前提である。このような興奮を超越した冷静と成熟、これは大いに高く評価されるべきである」「若いからかもしれないが、私たちはすべてに対していつもすぐに反応してしまうのかもしれない。同様に、若いから幼稚であつて、成熟していない。私たちはかつて、ある時期、負のモノを変える力もなく、（それに）ガツカリして失望してしまったので、西側の朽ちた価値観に心を惑わされ、いわゆる民主と自由に憧れた。血が滴る現実が私たちに言っている、アメリカを頭とするNATOの犯罪行為（ユーゴスラビアの中国大使館爆撃事件のこと）は、彼らが一貫して宣揚してきた価値観が何とウソ偽りであり、私たちの民族の命運や国家の利益と比べ、彼らのいわゆる『民主』や『自由』の名義が何と廉価なモノであるかを証明して

いる」「大学生は青年文化の代表として、西側の先進的な文化と悪くないモノを自覺的に受け入れている。……彼らは西側文化をしだいに熟知するに従い、大学生たちはさらにどれが取り入れる価値があるのか、どれが西側文化のカスカを見極めている」。

「六・四」をうまく
利用した江沢民
この三つの記事に共通することは、「六・四」をアメリカと結びつけて取り上げている点だ。共産党は「六・四」十周年にあたり、「六・

四」に対するなんらかの総括を示す必要に迫られていただろうと思われる。もちろん十周年を無視するという選択肢もあつた。この十年間の「六・四」に対する党や政府の反応、そして「六・四」のことを表に出すことが「寝た子を起こす」ことになりかねないことなどを考慮すると、無視する可能性は高かつたと思われる。そうした折、NATO軍によるユーゴスラビア中国大使館爆撃事件は、まさに絶妙のタイミングで発生した。

「六・四」は、共産党による一党支配の矛盾と改革・開放政策を経て出てきた矛盾が原因で発生した。また、事態がエスカレートしたのには、党内の権力闘争が関係したことも無視できない。しかし、爆撃事件のお陰で、共産党は本質を素通りし、アメリカを敵とし、中国国内のナショナリズムを喚起する形で、「六・四」十周年の総括をすることができた。

江沢民は「六・四」十周年を政治的安定の手段に利用したと言えるだろう。

爆撃事件による人々の反米ナショナリズムは、予想以上に高揚した。しかし、人々は「六・四」には沈黙した。「学生は中国大使館爆撃事件で、すでに発散しきった」と言う人もいたが、爆撃事件の有無にかかわらず、今の学生が「六・四」に関連して何か行動を起こしたとは思えない。

「六・四」十周年が政治的に利用された面もあったが、この十年で党や政府の「六・四」への評価がまったく変わっていないことも明らかとなった。その評価とは、第一に政府のとった措置は正しかった、第二に学生らの行動は「動乱」だったという点である。

現在、中国内外の民主活動家や中国研究者は政治改革の前提として、「六・四」の再評価をあげる。しかし、当時の措置の決定にかかわった指導者がいまだに最高指導部内にいることから、また江沢民自身は「六・四」があつたからこそ、現在の地位があることを考慮すれば、中国共産党の一方支配が続くかぎり、「六・四」に対する再評価はあり得ない。

「もう十年も前のこと。子供の頃のことと、よくわかっていない」。北京大学のある学生は「六・四」について、このように話してくれた。できない「出来事」

たぶんこれが「六・四」に対する大学生の大半の認識だろう。当時ま

だ小学生ぐらいだった現在の大学生は「六・四」が起こったことを知らないわけではないとしても、当時その意味までは理解していなかっただろうし、現在当時の情景を覚えていゝるわけでもないだろう。

北京大学のある年輩の先生に聞いたところ、「私たち教師も、そして学生たちも、あの日（「六・四」）のことをけっして忘れることはありません。それは歴史、永遠の歴史です。今（私たちが「六・四」に対して）何か行動を起こすことはありません。しかし、アメリカが自分たちのやり方を中国に強制することを認めるわけにはいきません。中国には中国の国情があるのです。そして、現在政府が行っている経済発展のための政策を妨げることも、私たちにとってはマイナスです。今、朱鎔基総理は一生懸命やっています。私たちは政府の政策を支持します」。

彼は大変良心的な中国人で、それ故に当局の公式見解に従順な人なのだが、彼の発言の後半部分の見方が人々のなかでは大半を占めているのではないだろうか。しかし大切なことは、最初の部分である「けっして忘れることはない」という点だ。

「六・四」が発生した当時、私はまだ大学生だった。当時、人民解放軍の装甲車が天安門広場に侵入する映像を見て、悲惨さを感じながらも、「この事件は、今は確かに悲劇的な大

事件として大きく伝えられている。しかし後世、中華人民共和国の歴史全体から見れば、それは一瞬の出来事として認識されてしまうようになるにちがいない」と妙に冷静だったことを覚えている。例えば、反右派闘争や文化大革命といった中国の歴史上の事件は、すでに過去の一出来事となってしまうている。そして、十周年をむかえた「六・四」も時間とともに一つの歴史になってしまったのかもしれない。

しかし、人々の記憶のなかからこれらの出来事が忘れ去られることはない。その時に苦勞をした人ほど記憶は鮮明なのである。中国社会科学院日本研究所のある年輩の研究員が私に日中戦争について次のように話してくれたことがある。「二度とこうした悲劇を繰り返してはならない。繰り返さないために私たちはどうしたらいいのか、日々考えているのです」と。その言葉に、過去の辛い歴史を引きずることなく、何とか前向きに生きていくと、自分を納得させようとする彼の苦悩の一面を垣間見ることができる。「六・四」を忘れることのできない人の多くも、きつとあの悲劇を乗り越えて、そしてあの悲劇を繰り返さないように一生懸命生きているのだらうと思う。